

鱗翅類採集家の系譜学 *The Collector* (小説 1963、映画 1965) 論

魚返真史

大著『昆虫採集学』(一九九一)によれば、昆虫を採集する人(第一者)、採集される昆虫(第二者)、及び採集行為に無関係の第三者それぞれに対してモラルを発動すれば、昆虫採集をめぐる犯罪やトラブルの多くは回避できる¹⁾。すなわち採集者が、公衆道徳的マナー(第三者に対する配慮)、自然保護(昆虫自然に対する配慮)、安全対策(採集者自身に対する配慮)の留意を徹底したならば、盗採、不法侵入、密輸、法に触れずとも犯罪的と批判される濫獲などは起こらない。

しばしば「科学への興味の第一歩となる健全な趣味として、敬意を払われていた」昆虫採集が「犯罪的な行為」に転落したと言われるような場合に²⁾、「犯罪」の意味するところが

法律上の犯罪ならば、以上に述べた配慮によって昆虫採集の名誉は挽回されるだろう。しかしそもそも「犯罪的」とされるのが昆虫採集という営為そのものであるならば、昆虫を捕まえて標本にして集めるという営み自体は法律上のいかなる罪にも問われはしない。

私が *The Collector* という題の小説を書いた理由の一つは、死に至らしめる倒錯に対する憎悪を表明することにある。つまるところ博物学の採集家はすべて同じものを集めている…生命の死である。〔……〕愉楽のために鳥の卵や昆虫といった命あるものを集めることは悪である。道徳上、他に選択の

余地の無いことは明らかである^③。

イギリスの作家ジョン・ファウルズが、小説『コレクター』(The Collector)』(一九六三)を生んだ動機について述べた一節である。ここでは少年時代に熱中したこともあるという採集という営み自体が、「道徳上 (moral)」の「悪 (evil)」だとされている。一九六五年にはウィリアム・ワイラー監督によって、この作品を原作とする同名のハリウッド映画が世に送り出された。共に興行的成功を収めた小説も映画も、蝶の採集を趣味とする男が、フットボール賭博で大穴を当てたことを機に麗しき美大生の女を誘拐し、人里離れた古い館の地下室に監禁し、やがて死なせてしまうという大筋である。

「……」この映画によって、チョウの採集者はずいぶん迷惑をこうむり、チョウマニアといえ、一種の精神異常者か性格破綻者に見られた時期がありました「……」^④。

「……」このような映画の流れは、つい最近、日本のテレビドラマにあらわれた人物像を、変人として典型化するという、なげかわしい現象を起こすにいたった。それは、一九九二(平成四)年夏の民放「ずっとあなたが好きだった」に出て

くる「冬彦さん」という、真面目一方の銀行員で、主人公の女性と見合結婚するが、どうも考え方の合わない蝶マニアの変人として登場してくる。

「……」この間にはいちいち名はあげないけれど、同種の考え方を示していくつかの文芸作品が洋の東西にあり、水面下でこの偏見を支持してきたかのようにみえる^⑤。

異常な昆虫好きで殺人者の主人公が出てくるコレクターという映画とこのドラマが巨悪の根源なんです。ああいう人間が昆虫好きになるんだというイメージがすっかり定着してしまっただから^⑥。

『コレクター』の主人公の男によって形成された「イメージ」・「人物像」は、「偏見」となって現実の蝶の採集家に重ねられてきた(と、現実の蝶の採集家たちは憤っている)。蝶の採集家を「精神異常者」・「性格破綻者」・「変人」などと「典型化」する作品はミステリを中心に今も生み出され続けているが、それらの先祖にあたるのが『コレクター』ということらしい。しかしなぜ殊更この作品なのか。『コレクター』以前にも昆虫とりわけ鱗翅類(蝶と蛾)^⑦の採集家が登場する作品は数知れずあったのである。

本稿の目的は小説と映画『コレクター』における鱗翅類採集家のありかたを見ていくことによって、数多の先行作品を差し置いて『コレクター』が鱗翅類採集家のイメージを形成し定型化させ、時に問題視される根源のように語られる要因を探り、フィクションに現れる鱗翅類採集家の系譜における位置づけを考えることにある。

鱗翅類採集家の系譜

採集家ができるだけ美しく、できるだけ長く保存するために蝶を殺し、針を刺し、標本にすることは、ジャン・ジャック・ルソーの時代からしばしばセンチメンタルな態度で、野蠻で残忍なことだと見なされてきています。そのほか一七五〇年から一八五〇年の間の文学には、もっぱら蝶を殺して針を刺して楽しんで、感嘆したりする男が、滑稽な、些事拘泥型の人物として登場します^⑧。

ヘルマン・ヘッセがアドルフ・ポルトマンの写真集『蝶の美 (Falterschönheit)』(一九三六)に寄せた序文「蝶について (Über Schmetterlinge)」の一節である。鱗翅類の愛好家ヘッセは、鱗翅類採集の黎明期から採集家へ注がれてきたまなざし

に見られるこのような傾向に対して、「ナンセンス」だと指摘している。

昆虫採集は一八世紀、近代的な博物学 (natural history) が繁栄するなか西欧貴族の間で広まったとされ、鱗翅類の採集は専門団体オーレリアン協会^⑨をはじめ人気を博した。その一方で、たとえば鱗翅類の愛好家で銅版画家のモーゼス・ハリスが世に送り出した蝶類図譜『オーレリアン (The Aurelium)』(一七六六)の The Glanville Friulary (ヒュウモンモドキの一種)の項には、その英名の由来であるグランヴィル夫人の死後、一族が彼女の「狂気の行為 (Acts of Lunacy)」の評判から名誉回復しようとした逸話が記されており、鱗翅類の愛好家がいれば「少々おかしい (wee bit daff)」と見なされがちであったことが指摘されている^⑩。また採集家であることを隠すため書物に擬態する標本箱が作られ、今なお英国産の標本箱が奇麗な規格を有するのはその名残であるという^⑪。

一九世紀になると帝国主義の後ろ盾を得た博物学は、殊にヴィクトリア朝時代のイギリスで、より幅広い階級の人々の間にも浸透していった。そして博物学が築いた自然物の分類体系は、生物学を含む自然科学 (natural sciences) 発展の基盤となり、採集によって得られる標本は「証拠 (voucher)」という重要な役割^⑫を認められる。しかし鱗翅類の採集が「狂気の行為」

であるというような見方は、採集家へ注がれる視線の中に留まり続けた。たとえば二〇世紀半ばにイギリスで出版された採集の指南書を開けば「チョウの収集家は、いたずらに自分の収集をふやしたいばかりにチョウを集めると、よく非難される」¹³とあり、またファウルズが採集を「悪」と見なしていたのはすでに述べた通りである。

ふたたびヘッセの引用文に戻り、現実の採集家へのまなざしとフィクションの採集家との関係を考えてみる。ここで語られている現実の採集家と文学の登場人物の採集家は、蝶を殺して針を刺すという営み自体は一見して変わらない。しかし現実の採集家は、目的の比重が「できるだけ美しく、できるだけ長く保存する」つまり標本にすることにおかれ、それは自然科学に寄与する証拠となり得る。ただしその営みは第三者の目からは「野蛮で残忍なことだと見なされる」。他方、文学の中の採集家は、端から「滑稽な、些事拘泥型の人物として登場」する。そのような人物が行う採集の目的の比重は、「もっぱら蝶を殺して針を刺して楽しんで、感嘆したりする」という個人的な感情におかれている。彼は現れた時点ですでに第三者のまなざしを背負われており、しかしそうとは明示せず語られることに対して、ヘッセは「ナンセンス」と反応したのだろう。

ヘッセ同様、鱗翅類を愛し、その専門家でもあったウラジー

ミル・ナボコフについての研究書 *Nabokov's Blues* (一九九九) には、次のような記述がある。

〔……〕しばしば強迫・衝動的な蒐集と組み合わせられる昆虫への関心は、小説と映画『羊たちの沈黙』からジョン・ファウルズの小説『コレクター』までが証明しているように、たいていは殺人犯の精神病の証拠として見なされている。ナボコフは生前この伝統に痛切に感じていた。「ウェルズ、コナン・ドイル、コンラッドだけが鱗翅類研究者を描いた——彼らはみな密偵、殺人犯、神経症患者のいずれかだった」と、一九五三年にハリー・レヴィンへの手紙に書いている¹⁴。

ナボコフはそのような「伝統」を完全に拒絶していたわけではなかったが、彼の作品に登場する「鱗翅類研究家 (Lepidopterists) たちは常に型にはまらない、より複雑な様相を呈している¹⁵。引用文に『コレクター』と『羊たちの沈黙 (The Silence of the Lambs)』(小説一九八九、映画一九九一)への言及があるが、ここではナボコフの手紙の中で挙げられている作家の作品に注目したい。いずれの作品が念頭に置かれていたかは定かでないが、"Lepidopterist"が登場するH・G・ウェ

ルズ『蛾 (A Moth—Genus Novo)』(一九一五)、コナン・ドイル『バスカヴィル家の犬 (The Hound of the Baskervilles)』(一九〇二)、ジョセフ・コンラッド『ロード・ジム (Lord Jim)』(一九〇〇)を見てみる。

まず『蛾』は、ハプレーとポーキンズ教授という二人が「小蛾類 (Microlepidoptera)」の分類などを巡って論争を繰り広げる話である⁵⁶。その挙句ポーキンズは死に、ハプレーは他の誰の目にも見えない蛾を捕まえようと奮闘しながら、壁にクッションを張った精神病患者用の保護室で余生を送る。ナポコフの言う「神経症患者 (neurotics)」に当てはまるだろう。

続いて『バスカヴィル家の犬』に登場するステープルトンについて、ワトスン博士は次のように語る。

ずっと言葉になっていなかった直感が、曖昧なものでしかなかった疑念が、突如として明確になった。それらが向かうところは博物学者だった。麦藁帽を被り捕虫網を携えているあの無表情の青白い顔の男が、何やら恐ろしく思えてきた。笑顔の中に残忍な心を隠し持ち、尽きることはない根気と悪知恵に長けた生き物⁵⁷。

事件の真相は暴かれていき、ステープルトンが遺産目当ての

「殺人犯 (murderer)」であることが明らかになる。

最後に『ロード・ジム』のスタインは、博物学者の弟子として南洋諸島を旅し、現地の戦に加わりながら採集を続け、年老いてからは諸島の産物を高いながら標本を分類し配列し、ヨーロッパの昆虫学者たちと文通し、自身の宝の目録を作っている⁵⁸。一見して「密偵、殺人犯、神経症患者」のいずれにも当てはまらないが、昆虫採集の帝国主義と密接に関わる側面を語る上で重要な人物である。

以上の一九〇〇年前後の三作品は、いずれも語り手は鱗翅類研究者ではない。第三者によって語られる鱗翅類研究者の姿は、物語の進行と共に「殺人犯」や「神経症患者」に分類され得るようなありかたを呈することもある。しかし同時に、彼らがその道を極めていくことへも言及がある。ハプレーとポーキンズは王立昆虫学会での弁論や論文で争い、ステープルトンは昆虫学の大家、スタインは名声を得ている博物学者、学識あるコレクターであると語られる。第三者が侵入できない鱗翅類研究者(第一者)と鱗翅類(第二者)だけの領域があり、それは第三者の目に鱗翅類研究者とその営為が得体の知れない怪しさを醸して映る要因にもなるが、その領域での営みが非難されることはない。

注目すべきはこの中で「殺人犯」に属するステープルトンの

鱗翅類の採集という営みが、殺人の動機にもトリックにも関与していないという点である（だからこそ映像化の際にこの設定は必須ではなく、作品によっては蝶や蛾を採集する者として登場しない）。二〇世紀の『コレクター』や『羊たちの沈黙』との大きな相違はそこにある。それら二作品では、あたかも『lepidopterist』であるがゆえに罪を犯すかのように、鱗翅類の採集（や飼育）の営みが、彼らの犯罪と緊密に結びつき、「殺人犯の精神病の証拠」になり得るようなものとして現れている。『コレクター』が鱗翅類採集家のイメージを形成し、定型化させた根源だと語られるのは（『羊たちの沈黙』は二十年以上も後の作品である）、他でもないこの作品が、フィクションの中のとある一人の採集家が「殺人犯」や「神経症患者」に分類され得るという話ではなく、鱗翅類の採集という営みそれ自体を問題視するものとして、多くの読者や視聴者に受容されたゆえだと考えられる。次章以降はその要因を探るために、小説と映画『コレクター』における鱗翅類の採集と女の監禁という二つの営みのありかたとそれらの関係を見ていく。

小説『コレクター』

“Pale Clouded Yellow”

小説『コレクター』は男（Frederick Clegg、以下フレッド）の語り（第一・三・四章）と、女（Miranda Grey、以下ミランダ）が監禁中に綴ったとされる手記（第二章）から成る。第一章、「私」（フレッド）は窓越しや電車内ではしばしば眺めた「彼女」について次のように語る。

彼女を見ると私はいつも稀少種を捕まえるときのような気持ちになる。慎重に近づき、息を殺して。たとえばPale Clouded Yellow。彼女をいつもそんなふうに思っていた。つまり捕まえにくくて、滅多にいないくて、とても洗練されている。他のものとは違う。ただ可愛いだけのものとも違う。真の女人向きなのである⁽⁶⁾。

「私」は「彼女」を“Pale Clouded Yellow”（モトモンキチウ）に喩える。語りの中に出てくる蝶の英名“Black Hair-streak”（リンゴシヅミ）“Large Blue”（トリオンコマシヅミ）等の中にあつて“Miranda Grey”とらう名は、字面や響きから蝶を連想させる（「彼女」の瞳の色は“grey”である⁽⁶⁾。逆に蝶の英名から女が連想され、「私」は職場の同僚に“Cabbage White”（モンシロチョウ）や“Painted Lady”（アムバカタテウ）との仲を冷やかされたりする。

莫大な富を得た「私」がまず計画したのは、どこかの地方へ出かけて蝶の採集と撮影をすることであった。道具を揃え、運転免許を取得しバンを購入し、その旅では蛾も採集するかもしれないなかった。しかし「私」は旅へ出ることなく夢を見る。それは「彼女」を捕まえて快適に閉じ込めておくというもので、恥るうちに夢は夢であることをやめ、郊外の古い館を買って調度品や服を揃え、待ち伏せを始めて十日後、「蝶の場合には時々あることだが稀少種がいる場所へ赴いてそのときは見つからず、次に探す気もなく訪れたとき目前の花にどうぞ捕まえてくださいと言わんばかりに止まっていたりする」⁽²⁾という具合に「彼女」を見つめる。そして鱗翅類の麻酔や殺虫に有効なクロロホルムを嗅がせて気絶させ、バンで連れ去り館に監禁する。夢が正夢になった喜びを「私」は、「Mazarine Blue」を二度捕まえたか Queen of Spain Fritillary を捕まえたようなものだ。つまり生涯に一度あるかないかというような、本当に実現するとは期待せずに夢見ているようなことだ⁽³⁾と言い表す。

「私」は目をつけた「彼女」を「いつもそんなふうに見ていた」と「Pale Clouded Yellow」(キトギンキチョウ)に喩え、さらに「彼女」を誘拐したことを「Mazarine Blue」(ウスルリシジミ属の一種)や「Queen of Spain Fritillary」(スペインヒョウモン)を「捕まえたようなものだ」と蝶の捕獲に喩えて語

る。いずれも「like」によって比喩であることが示される。直喩によって、蝶と「彼女」は結びつけられている。

“collect”

“collect”を「集める」と訳す場合、必ずしも捕獲して標本にするという意味合いは含まれないが、語りからはフレッドが蝶を「捕獲する(catch)」、「展翅し整える(set and arrange)」ことも行なっている、すなわち「採集」しているとわかる。蝶の採集の場合、捕獲の次の段階は展翅して標本を作ることである。しかし語りの中に展翅の比喩は出てこない。

捕虫網を携えていないときには、欲しい蝶を親指と人差し指で捕まえる(私はいつも凄く上手い)。背後からゆっくりと近づいて捕らえたら、胸を摘まなくてはならない。胸は震えているだろう。それは毒ビンを使うときのように容易ではないのだ。しかも彼女の場合は倍も難しい。なぜなら彼女を殺したくないから。それは一番望まないことである⁽³⁾。

たとえば小さな蛾は「毒ビン(killing-bottle)」に入れるが、蝶の多くに対しては「胸を摘む」という方法がある。その意図は胸部を圧迫して仮死状態にさせることにあるが、それは持ち

帰るまでのあいだ硬直を避けるため、展翅の段階までに蝶は死んでいなくてはならない。「私」にとって「毒ビン」に入れるのは容易で、「胸を掴む」のはそれよりも難しく、一等高難易度なのが殺さないことであるという。蝶の展翅の比喩が語られない要因は、「私」が「彼女」を殺すことを想定せず、蝶を展翅し標本にする作業で諭えるべき段階が訪れないことにあると考えられる。

彼女が決して理解しなかったことは、私にとって所有するところが重要だということである。彼女を持っているだけで十分だった。何かすることは必要ではない。ただいつまでも安全に所有していたかった⁽²⁴⁾。

「私」が「彼女」に対して用いる動詞は“have”であって、“collect”ではない。「蝶以外は集めません⁽²⁵⁾”と言う「私」が、自身の言葉として“collect”を用いるのは蝶に対してのみであり、それ以外は比喩でも語られない。他方、「彼女」が発したとされる言葉としては、「彼女」に対しても“collect”という語が用いられる。以下、「彼女」の発言とされる言葉のみ引用符で囲われている。

私は昆虫学者です。蝶を集めています。

「もちろん」と彼女は言った。

「新聞にそう書いてあったのを覚えてる。今あなたは私を採集したわけね」

彼女はそれを可笑しいと思っているようだった。私は、ある意味では、と言った。

「いいえ、ある意味じゃない。文字通り。この狭い部屋の中で私に針を刺しておいて、好きな時に来て眺めているじゃないの」

私はまったくそんなふうには考えません⁽²⁶⁾。

「あなたは私を採集した」という「彼女」の発言に対して、

「私」は「ある意味では (in a manner of speaking)」と「言う言葉を挟もうとし」、「彼女」は「文字通り (literally)」であると「言う。ここでは「彼女」の言葉として蝶の採集の比喩が語られるが、それは文法上は比喩の形式をとらない隠喩である。

“collector.”

ミランダの手記とされる第二章では、「彼にとって私が何かを知っている。彼がずっと捕まえたかった一頭の蝶だ」、「私は可哀想な死んだ蝶たちのことを思った。私の仲間の犠牲者た

ち、「私は陳列された標本の一つだ。羽ばたいて列の外へ出ようと試みれば、彼は私を憎む」⁽²⁾というように、「私」(ミランダ)は蝶が「仲間の犠牲者」であり、自身を「一頭の蝶」・「標本の一つ」であるとする。それらは監禁の被害者から犯人への言葉なのだが、「文字通り」には採集された蝶から採集家への言葉となる。「私」は蝶の採集という営為について、蝶(第二者)として語るのだ。「蝶以外は集めません」と言うフレッドのコレクションの対象にミランダを加えるのは、「私」(ミランダ)自身による隠喩なのである。

隠喩の成立には、「私」と蝶が「彼にとって」同じであり、いずれも採集の対象であるという推測が介在する。「私」は「彼は採集家だ。彼の中にあるのは巨大な死物だ」⁽³⁾などと「彼」を「採集家・蒐集家(collector)」であると見なす。そう見なすことが彼の人格の破綻を裏づける方へ作用するようであるのは、「私」が第二者の立場から採集家を非難するためだけではない。第一章の会話においてミランダは、蝶の採集を「生の美を奪う」と非難するのみならず、「科学者は嫌い」、「物を集めて分類し命名し、そして忘れる人々が嫌い」⁽⁴⁾などと言い、非難の矛先は蝶の“collector”に限らない。また“collector”が「最悪の動物」、「アンチ生命、アンチ芸術、あらゆるもののアンチ」⁽⁵⁾であることは、手記の中で長々と回想される、ミランダ

ダが思慕する画家から教え込まれた美術品の“collector”に対する考えであった。ミランダの語る“collector”という語には、蝶の採集における第三者、さらにはミランダとフレッドの関係における第三者のものである価値判断が含まれている。

フレッドはミランダから採集家だと見なされるのだが、二人の関係性が語られる場合以外で採集家(第一者)と蝶(第二者)の局面について語られることは、フレッドの語りにおいても極めて少ない。また二人の関係性を語る上でも、蝶の採集の話は一つの要素に過ぎず、たとえば二人の間にはいつも「階級(class)」が横たわっていたと語られるが、それは生物学上の分類階級ではなく、イギリス社会における中産階級のミランダと、より下層の階級に属するフレッドの意味である。あるいは二人の関係性は、『シェイクスピア』⁽⁶⁾ (The Tempest)』(二六一)の登場人物になぞらえられる。フレッドは「ファードイナンド」と名乗るが、ミランダは彼をミラノ公爵の娘ミランダと結ばれるナポリ王子ファードイナンドではなく、怪物キャリバンと見なし、その名前と呼ぶ。「階級」や『あらし』の話題に比べて、蝶の採集の話題が際立っているわけではない。第一章のフレッドの語りの中に、「もしあなたが蝶の採集をやめるように言うなら、そうします」、「あなただけが生き甲斐です」⁽⁷⁾などという言葉があるが、ミランダを捕らえて以降は

新たに蝶を採集したという話はなく、本当にやめたのかもしれない、少なくとも等閑になっていると疑わざるを得ないほど、蝶の採集は物語が進むにつれて影が薄くなっていく。

“photograph”

再びフレッドが語り手となる第三章では、肺炎に罹った「彼女」が死ぬまでのことが語られる。「彼女」が死んでも、展翅や蒐集の喩えは出てこない。さらに続く第四章で「私」は、「彼女」を「殺した (killed)」のではなく、「彼女」は「死んだ (died)」のだとする²⁹⁾。「死者 (the deceased)」を直視しないように毛布で包み、箱に収めて樹の下に埋める。「昆虫学者 (entomologist)」を自称する「私」にとって、「彼女」の美しさは蝶に喩えられても、生物学上は蝶でないその死骸はコレクションの対象ではなかったであろう。しかし「私」は「彼女の亡霊と見紛うほどよく似た娘を街で見かけ、その娘が同じイニシャルMであることを突き止め、「彼女」等を比較したりするためになされる次の捕獲を仄めかして語りを終える。この時点で「私」は女の「collect」を始めるかのようであるが、何と比較しようというのか。「彼女」を埋めた後、残っているのは写真である。

当初「私」が計画したのは、蝶の採集と撮影を行うための旅

であった。その後、撮影は「彼女」を被写体に行われる。ただし野外で生態写真を撮ろうとしていた蝶の場合とは違い、「彼女」の撮影は「私」の言うところの「所有」の延長線上においてなされる。「私」は「彼女」の美を「フォトリジェニック」³⁰⁾という言葉でも表し、写真を撮らせて欲しいと懇願し、読書する「彼女」の写真を撮り、ポーズをとらせるようになり、やがて暴れた「彼女」をクロロホルムで気絶させたときには、下着以外を脱がせて撮影する。そして脱走を企てた「彼女」に裸で誘惑されたとき、失意と怒りに囚われた「私」は、自ら現像し焼きつけた「彼女」の写真を眺める。「時々その写真(彼女にクロロホルムを嗅がせた日の)を見た。時間をかけて見た。写真は話しかけてこないから。」さらに「彼女」を縄で縛り、服を脱がせて撮影する。

縛りつけてポーズをとらせることは展翅を思わせる。しかし蒐集可能な状態となるのは、フィルムや印画紙に小さく定着させられた、「彼女」の像であり写真なのである。「彼女」を捕らえて以降、蝶の採集は継続されているかどうか定かでないが、「私」(フレッド)が「collector」であり続けているとすれば、それは女の写真の“collector”である。

映画『コレクター』

映画『コレクター』には、写真を撮影するという展開や、『あらし』への言及や画家についての長大な回想はない。男（愛称はフレディのようだがフランクリンという偽名を使っている）によってなされる。蝶の採集と女（ミランダ）の監禁という二つの営為のありかたとそれらの関係は、小説とは異なる様相を呈している。

まず何より三人称の視点から捉えられる。そして音楽がある。冒頭、男は捕虫網を片手に野を駆け、ハーブシコードのような音色で長調の旋律が穏やかに鳴っている。タイトルの文字が現れるとホルンやティンパニのような音が不穏に響き、男が蝶に忍び寄り網を被せると、木管楽器を中心とする軽やかな長調の管弦楽に変わる。その後も変奏しながら繰り返し流れる一連の旋律は、この映画のテーマ音楽といえる。

蝶をビンの中に入れ、顔の前に掲げるとき初めて男の顔がよく見える（フォトジェニックな容姿は興行的事情によるのだろう。小説にそのような設定はない）。蝶はキペリタテハ（小説に登場しないこの蝶は、イギリスでは“The Camberwell Beauty”（キャンバーウェルの美）、アメリカでは“The Mourning Cloak”（喪服）と呼ばれ、舞台設定はイギリスだがハリウ

ッドに渡った美人は喪服を着ている）らしい。採集家（第一者）と蝶（第二者）だけのシーンは、これが初めて最後である。女が初めて現れるのは、美術学校から出てくる彼女を男が車で待ち伏せするシーンで、尾行するあいだ蝶を捕らえるシーンに流れていたテーマ音楽が変奏する。蝶と女という外見の異なるものを繋ぐのは、男がそれらを追いかけるときに流れる同じ旋律である。彼女を捕らえる瞬間は叫び声しか聞こえないが、連れ去るときには鼓動のようなリズムを刻みながら再び鳴りはじめる。

蝶の展翅や蒐集については中盤、男が女にコレクションを披露するシーンに集約される。部屋の中は壁一面に蝶額が飾られています。机には展翅板が並ぶ。男は「これは私の趣味です。ずっと集めています。私は昆虫学者です」³⁴と云う。モルフオ等の額の前では「これらの大部分は中米産です。幼虫を送ってくれる人に連絡して自分の手で育てています」と説明する。得意気に次々と蝶の標本を見せる間、冒頭と同じハーブシコードのような音を中心とする、短調の旋律が淡々と流れている。一通り見終えた女は、「稀少種」と説明されたクロキアゲハのような成虫入りのビンを掴み、ガラスに翅を打ちつけている蝶を逃がそうとする。音楽が緊迫し、男は声を荒げて奪い返す。

蝶の飼育への言及は小説にもあるが、中米産の幼虫を云々と

いう詳しい説明は映画にのみ出てくる。蝶と女が飼育の対象として結びつけられようとするのだが、ピンの中で暴れる成虫を傷つくに任せておくことは、採集家ならば（飼育家でも勿論）あり得ないことである。

そして不穏な音楽が流れ続ける中、標本箱のガラスに呆然とする女の顔が映り、「そして今、私を採集したというわけね？」という声が被さる。切り返して男が映るとテーマの旋律の一部が重苦しく鳴り、男は鋭く眼を光らせて黙っている。その後、音楽が止んで言い合いになり、女は男に「これは死。わかる？死以外の何ものでもない」、「これらは死んでいて私も死んでいる。ここにあるものは全て死んでいる」と訴える。すると女の表情が強張り、合点がいったかのように、「それがあなたの愛するものなの？ 死が？」と言う。またしても不穏な音が響き、冷やかな表情の男が映る。女は項垂れて部屋を後にし、男も続く。男が乱暴に扉を閉めたせいで、展翅板の上の蝶の翅が煽られてちぎれる。

標本箱のガラスに女の顔が映り込み、中に並ぶ蝶の標本に女が重ねられようとするが、同一の画面上において蝶と女の外見の違いも際立つ。そこへ「私を採集したというわけね？」という女の台詞が被さり、それに対して男は黙っている。そして死が強調される。女は動き、生きてるように見えるが、「それ

があなたの愛するものなの？ 死が？」と問いかけ、男はまたもや何も答えないが、不穏な音楽が流れ、無言のうちにネクロフィリアに仕立て上げられていく。

男が蝶の採集家であることが見せられるべきシーンである。

しかし同時に、蝶と女が音楽による繋がりのみならず飼育の対象として、採集の対象として、さらにはネクロフィリアの対象として結びつけられようとするシーンである。また女が、自身と蝶が男から同一視されていると気づいて恐怖し、サイコ・サスペンス映画が確立されるシーンでもある。女の問いかけに対して男は、不穏な音楽に口を封じられるかのように黙っている。その間、蝶はガラスに翅を打ちつけ、展翅板上の翅は破れる。

蝶に対するあるまじき扱いの数々からして、実際に見せられているのは男の蝶の採集家としての破綻である。男が蝶の採集家であるがゆえに美女を採集したという筋書きがもたらされるとき、採集家（第一者）と蝶（第二者）の関係は壊れている。

終盤は蝶にスポットライトが当たることなく、脱出を試みる女とそれを阻止する男の攻防が中心となる（武器として針を振りかざすのはむしろ女の方である）。

「鱗翅類研究者の行列」

鱗翅類と美女は古から結びつけられてきた。ギリシア語で蝶は魂と同語の *Psyche* であり、絵画や彫刻におけるその姿は、蝶の翅を持つ美女あるいは蝶そのものの形をとったものがよく見られる。そして二名式学名の創始者リンネは蝶に古代ギリシア・ローマ神話に由来する学名を数多くつけ、中には女神やニンフなどの名が沢山ある。

「私こそが現代における蝶の最高の標本であるという純粋に科学的な原則に基づいて、モンマスが私と結婚したと思っておいでなのでしょう」

「モンマス公爵があなたに針を刺さないとよいのですが、公爵夫人」とドリアンは笑った³⁵。

ウェルズ、ドイル、コンラッドと同時代のイギリスで執筆したオスカー・ワイルド『ドリアン・グレイの肖像 (*The Picture of Dorian Gray*)』(一八九一)の一節である。蝶と美女の結びつきは常套であり、鱗翅類採集家もまた数多の先行作品に支えられている。フィクションの中に現れる鱗翅類の採集家は、現実の採集家へのまなざしと影響し合いながら、しばしば「滑

稽な、些事拘泥型の人物」などとして登場し、連なってきた。そして個々の作品を紐解けば、たとえばステープルトンは端から疑われていたわけではなかったが、彼が「殺人犯」であったという物語の結末は、鱗翅類採集家まつわるイメージの「伝統」を補強する。

『コレクター』は古からの蝶と美女の結びつきと、鱗翅類採集家像という、二つの流れを継いでいるようである。小説では蝶と美女の使い古された隠喩を読者に「文字通り」受け取らせようとし、また映画では *Psyche* を描いた絵のように、美女の姿に蝶の意味を含蓄して見せようとする。「ファーディナンド・クレグ卿、昆虫の侯爵」³⁶と戯れに呼ばれるものの階級社会の圧迫に喘ぐフレッドは、第三者から見れば蝶の採集家が美女を採集しかねないという、ヴィクトリア朝時代のサロンの戯れ言を具現化させられるかのように見える。だが『コレクター』において蝶と美女が結ばれるとき、肝心の採集家(第一者)と蝶(第二者)の局面は希薄なのである。男が蝶の採集家であることは、小説では等閑になり、映画では破綻する。いずれも男は女を捕らえたのち死なせるが、それは蝶の採集家であるがゆえに犯す罪というよりも、蝶の採集家としての不完全さ、採集家と蝶の関係の粗雑さゆえの結果のようである。

そうにもかかわらず『コレクター』が鱗翅類採集家像を形成

し、定型化させたと言われる最大の要因は、物語の主人公である男を蝶の採集家たらしめているものが、採集家（第一者）と蝶（第二者）の局面ではなく、もっぱら第三者から採集家へのイメージであることにこそあるだろう。その端からマイナスに著しく偏った採集家像によって、蝶と美女は結びつけられている。だからこそ、この作品は鱗翅類採集のマイナス・イメージを流布し、その営み自体を問題視するよう導くものとして多くの読者や視聴者に受容されたのだと考えられる。

原作者ファウルズが『The Collector』と名づけた小説を通して表そうとしたものが、採集という「悪」の営為への非難などではなく、「憎悪 (hatred)」だと述べていることも関係があるに違いない。男が犯す罪は女の監禁であり、それが糾弾されるならば至極もったもなことが、男は蝶の採集家として矢面に立たされている。蝶の採集家として覚束ないにもかかわらず。かつて『蛾』『バスカヴィル家の犬』『ロード・ジム』においては、第一者と第二者の領域が否定されることはなかった。たとえ鱗翅類を愛する者たちが第三者の目に奇異なものに映るとしても、それは第一者と第二者だけの親密な領域が察せられてこそ醸し出される怪しさであったはずなのである。

最後に、鱗翅類の愛好家で作家のフリードリヒ・シュナックが、「すべての鱗翅類」に捧げた書物『蝶の生活 (Das Leben

Der Schmetterlinge)』(一九二八)を引いて締めくくりたい。

「鱗翅類研究者の行列」と題されたその後書きには、鱗翅類を愛した者たち(学者、採集家、画家など)がそれぞれにふさわしい鱗翅類の姿(リンネならばムラサキシタバという具合)に喩えられている³⁷⁾。「行列」の眺めは、鱗翅類を愛する者たちのほうが、鱗翅類に無関心な美女などよりも遥かに、鱗翅類の比喩にふさわしいと思わせる。その最後尾に姿を現すのは、「蝶のすべての愛好家、蝶に恋している人びとに捧げられている」、「すばらしく美しいアゲハチョウ」である。目を凝らせばその蝶の斑紋には、文字が見えてくるという。

「……」左の羽に次のように読むことができるだろう。「私たちが次の存在において蝶であるならば……」そして右の羽にはこう書いてある。「……私たちはおそらくお互いに幸せにやって行けるであろう」³⁸⁾

蝶を愛する者は蝶になり、第一者と第二者は第三者に邪魔立てされることなく結ばれ、完全に一体となる。ただし、その「アゲハチョウ」は「まだ一度も、どこにも現れたことのない」、「夢の蝶」とのことである。

- (1) 馬場金太郎／平嶋義宏編『昆虫採集学』九州大学出版会、一九九一年、一八四—一九五頁。
- (2) 「愛するがゆえに標本にする」、『朝日新聞』二〇一七年六月七日、三面。昆虫採集は日本においては、幕末に西洋から伝来すると明治・大正の教育現場に取り入れられ、「昆蟲黄金時代」と呼ばれた昭和初年の昆虫ブームで脚光を浴び、戦後もしばらくは健全な趣味として社会的地位を得ていた。しかし高度成長期を迎え、活発化した自然保護運動の批判の矛先が汚染や開発のみならず昆虫採集にまで向けられると、学校教育では採集ではなく飼育・観察することが奨励される。(拙稿「昆蟲採集論」、『言語社会』第二二号、一橋大学大学院言語社会研究科、二〇一八年、五四—七二頁。参照。)
- (3) Fowles, John. *WORMHOLES Essays and Occasional Writings*. Ed. Jan Reiff. London: Vintage, 1999. p. 309-310. 筆者拙訳。
- (4) 久保快哉編『チョウのはなし』技報堂出版、一九八七年、一六八頁。
- (5) 今井彰『帝揚羽蝶命名譚』草思社、一九九六年、一〇八頁。
- (6) 川崎裕一「昆虫採集の、復権を願ってあります」、『BAHAN』第二四号「大分の昆虫」極東印刷紙工、一九九四年、三一頁。
- (7) ドイツ語「Schmetterling」や「Falter」、フランス語「papillon」などは鱗翅類を意味し、その中には蝶と蛾が含まれる。生物学上も蝶と蛾の間に明瞭な区別はなからず。同、Lepidoptera (鱗翅目) の昆虫である。
- (8) ヘルマン・ヘッセ『蝶について』、『蝶』岡田朝雄訳、岩波書店、一九九二年、九〇頁。
- (9) ‘Aurelian’とはマタラチョウ科に属する蝶の金色の蛹‘aureus’から生じた語であり、当時イギリスの鱗翅類愛好家たちは自らをそのように称してゐた。
- (10) South, Richard. *The Butterflies of the British Isles* 1906. 奥本大三郎『虫の宇宙誌(新装版)』青土社、一九八九年、三九—四〇頁。参照。
- (11) 同前。
- (12) 松浦啓一編『国立科学博物館叢書三、標本学、第二版自然史標本の収集と管理』東海大学出版会、二〇〇三年、三頁。
- (13) ロンード・グスマン『世界の蝶類』高倉忠博訳、主婦と生活社、一九七三年、九二頁。
- (14) Johnson, Kurt; Coates, Steve. *Nabokov's Blues The scientific Odyssey of a Literary Genius* McGraw-Hill, 1999, p. 293. 筆者拙訳。
- (15) 同前。
- (16) Wells, H. G. *A Moth—Genus Nova*. Cryptofiction Classics, 2013. p. 5-22.
- (17) Doyle, Arthur Conan. *The Hound of the Baskervilles*. London: Penguin English Library, 2012. p. 132. 筆者拙訳。
- (18) Conrad, Joseph. *Lord Jim*. London: Penguin Classics, 2007. p. 156-158.
- (19) Fowles, John. *The Collector*. New York: Back Bay Books, 1997. p. 3. 式一、同書『日本語訳は筆者による』。
- (20) イギリス英語には“grey”をも綴る。
- (21) Fowles, John. *The Collector*. op. cit., p. 22.

- (22) *Ibid.*, p. 28.
- (23) *Ibid.*, p. 39.
- (24) *Ibid.*, p. 101.
- (25) *Ibid.*, p. 80.
- (26) *Ibid.*, p. 42.
- (27) *Ibid.*, p. 129, 135, 217.
- (28) *Ibid.*, p. 171.
- (29) *Ibid.*, p. 54-55.
- (30) *Ibid.*, p. 129.
- (31) *Ibid.*, p. 43, 51.
- (32) *Ibid.*, p. 303-305. 同段落の引用は同書より。
- (33) *Ibid.*, p. 55. 以下、同段落の引用は同書 p. 109 より。
- (34) Wylar, William. *The Collector*. Columbia Pictures, 1965. 以下、台詞の日本語訳は筆者による。
- (35) Wilde, Oscar. *The Picture of Dorian Gray*. London: Penguin Books, 2012, p. 212. 筆者拙訳。
- (36) Fowles, *The Collector*, op. cit., p. 37.
- (37) フリードリヒ・シュナック『蝶の生活』岡田朝雄訳、岩波書店、一九九三年、三五五―三六二頁。以下、同書から引用。翻訳は「蝶研究者の行列」となっているが、蛾も含まれているため「鱗翅類」とした。
- (38) 同前、三六二頁。

(おがえり まお／博士後期課程)